

## 研究ノート

## 乳幼児をもつ母親の転入に伴う困難

廣田幸子<sup>1)</sup>・矢島正榮<sup>1)</sup>・大野絢子<sup>1)</sup>  
 小林亜由美<sup>1)</sup>・小林和成<sup>1)</sup>

## The Problem arisen by the transfer of the Mother's with infants

Sachiko HIROTA<sup>1)</sup>, Masae YAJIMA<sup>1)</sup>, Ayako OHNO<sup>1)</sup>  
 Ayumi KOBAYASHI<sup>1)</sup>, Kazunari KOBAYASHI<sup>1)</sup>

キーワード：転入者、育児不安、保健師、育児支援

## I. はじめに

核家族化が進展し、地域社会における人間関係が希薄化するなどの理由により、母親同士で子育てに関する情報を共有し、助け合う機会も少なくなっている昨今、子育ての責任が母親に集中している。その結果、大きなプレッシャーを受けた母親が精神的に不安定になるばかりでなく、育児の孤立化を招いており、さらに、それが深刻化した場合には、母親による虐待といった社会問題につながることもある。

先行研究<sup>1)~3)</sup>によれば、夫婦仲が良いこと、父親が母親にとって心の支えになっていること、母親が父親とのコミュニケーションが良好であると認知していることなどが、育児における母親の不安やストレスを軽減させることが明らかになっている。つまり、父親自らが育児や家事を手伝うといった直接的な支援は必ずしも重要ではなく、心理的な支援が重要なのである。それは実母や義母においても同様である<sup>4)</sup>。また親族以外では、母親の学生時代の友人が最も頼りにされており、地域住民との人間関係は希薄で、特に専業主婦の母親の場合には、その傾向が顕著である<sup>5)</sup>。このことから、母親が親族や友人から心理的な支援を受けられず孤立している場合に、育児に対する不安が強くなることが示唆される。

一方、平成12年国勢調査による年齢別人口移動<sup>6)</sup>によれば、移動人口（5年前に現住所以外の場所に住んでいた人）は30～34歳が最も多く、次いで25～29歳、

20～24歳となっているが、この年代は、まさに出産あるいは育児真っ最中の世代である。従って、これらの状況から、乳幼児を抱えた家族には転居によって居住環境が変わる中で、子育てをしている母親が多いという現状が見えてくる。

家族の居住環境が変化した場合には、母親にとって、子育ての心理的負担はますます大きくなるものと考えられる。しかし、居住環境の変化に焦点を当てた研究は乏しいことから、転居により育児に対する不安や困難な内容を明らかにするとともに、保健師が支援すべき内容と方法を確立する必要があると考え、本研究に取り組むこととした。

本研究の目的は、居住環境の変化に直面した母親がもつ育児に対する不安及び困難の内容を明らかにし、支援すべき内容を検討することである。

## II. 研究方法

## 1. 対象者

対象者は都市近郊農村地帯のA村に在住し、村外から転入して3年以内であり、村内及び近隣市町村に両親及び親族がいない0～5歳の乳幼児をもつ母親3名である。対象選定については、A村保健師に研究協力を依頼した上で対象となる候補者を紹介してもらい、その候補者が乳幼児健診など母子保健事業に参加する日に研究者が赴いて研究協力の依頼を行い、同意を得た。

1) 群馬バース大学保健科学部看護学科

## 2. 調査方法

半構成的質問紙を用いて個別面接を行った。面接内容は、対象者の許可を得て書面及びICレコーダーに記録した。面接は、対象者の自宅において、周囲を気にせず落ち着いて話ができる環境で実施した。面接は研究者1名が行った。所要時間は30～60分である。

## 3. 調査内容

研究目的に沿ったインタビューガイドを作成し、以下の内容を質問した。

- 1) 対象家庭の基本属性(家族構成、家族の年齢、家族の健康状態、住宅の種類、母親の就労状況、両親の居住地、転入してきた時期)
- 2) 育児環境(近所や友人とのつきあい、夫の育児への参加状況、育児相談相手の有無)
- 3) 転入前後の育児上の不安や困難と解決方法
- 4) 保健センター及びその他の育児支援サービスの活用状況

## 4. 調査期間

調査期間は、2010年12月～2011年1月である。

## 5. 分析方法

面接内容の逐語録を作成してデータとし、データを読み返して内容を理解し、対象者の母親が転入後の生活の中で直面した不安・困難に関する記述を抽出した。次に、それらについて端的に意味を表す内容をコードとし、コード化したものを類似性のあるまとまりごとに分類しカテゴリとした。分析の信頼性を確保するため、カテゴリ化のプロセスを通して共同研究者間で検討を繰り返した。

## 6. 倫理的配慮

本研究は群馬パース大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

調査対象者には研究目的及び対象の選定方法、調査内容・方法、参加・不参加・途中棄権の自由の保証、調査に伴う拘束時間や録音による不快感、公表方法、データの管理方法・共有の範囲・破棄の時期と方法について文書と口頭で説明し、同意書の署名をもって同意の意思を確認した。

## III. 結 果

### 1. A村の概要

A村は山麓に広がる都市近郊農村地帯である。面積は約28km<sup>2</sup>であり、人口は14,753人(2011年8月現在)で周辺都市のベッドタウンとして人口増加している。年齢三区分別人口構成割合は年少人口が15.2%と全国と比べて高く、生産年齢人口66.1%、老年人口18.7%となっている。さらに自衛隊駐屯地があるなどの理由により村外からの転入者が多い。

### 2. 対象者の概要

母親3名から協力を得ることができた。年代は20代が2名、30代が1名で、子どもは2～3名、全員転入して2年目であった。調査対象者の概要を表1に示す。

### 3. 転入した母親が感じた不安・困難

「転入した母親が感じた不安・困難」について、母親の語りの記述17件から17のコードが抽出され、5のカテゴリが得られた。母親の語り、コード、カテゴリの対応を表2に示す。

カテゴリ名は<環境の変化に適應することの困難> <理想とする母親役割を果たすことへの困難> <母子だけの関係から社会生活を広げていくことへの困難> <発達障害をもつ子どもを地域で育てていく上での困難> <家族からの支援を得にくい中で育児をする困難>であった。

以下、各カテゴリについて説明する。尚、カテゴリ名は< >、コード名は「 」、実際の母親の語りについては“ ”で示す。

#### 1) 環境の変化に適應することの困難

<環境の変化に適應することの困難>は、「環境の変化へのストレスに対処することの困難」「環境の変化への子どもの適應に対する不安」「環境の変化の中で初めての育児と家事を両立することの困難」の3つのコードから形成された。

転入してきた母親は“引っ越しの片付けと新しい幼稚園に子供が行って、環境が変化してすごいイライラしてしまって一番大変でした”というように母親自身に「環境の変化へのストレスに対処することの困難」があり、“引っ越してきて……やっぱり夜は寝ないし初めての育児だったので家事も、おむつ替えて、風呂入れたりしていたら洗濯できなかったりして”と、初めての育児の場合には不慣れた環境の中で家事と育児に

表1 対象者の概要

事例	母親A	母親B	母親C
母親の年齢	20代	20代	30代
家族構成及び年齢	夫 30代 第1子 5歳 第2子 4歳 第3子 2歳	夫 30代 第1子 1歳 第2子 7ヶ月	夫 40代 第1子 5歳 第2子 3歳
家族の健康状態	良好	良好	良好
近隣などの付き合い	近隣住民とは挨拶程度である。子どもの幼稚園に親しい友人の母親がおり、互いの子どもを自宅で預かることがある。	近隣住民とは挨拶程度で、親しい友人はいない。	近隣住民とは挨拶程度である。子どもの幼稚園送迎の際、母親同士で話をすることがある。
転入した時期	2008年	2008年	2009年
事例の概要	母親が、三人の子どもの成長・発達に伴い、その度合いや子どもの個性により、精神的に混乱する時期もあるが、子どもと共に母親自身も成長し、現在は順調に育児ができる状況である。	子どもと家で過ごすことの多い母親が、子どもと母親自身のストレスを感じ、母子だけの関係に問題を感じている。関係性を拡大していく上で、身近な存在としての夫からの精神的支援が乏しく、実母からも共感が得られない。社会生活を築き、広げていくには母親の力だけでは困難であり、交流できる夫や身内からの支援がない。	育児に関するストレスを強く受け止める傾向がある母親が、夫の精神的支援は偏りがあり、思いを受け止めてくれる実母とは物理的な距離があるため、直接的な支援を得にくい。更に、子ども自身が発達障害をもつ中で、地域で生活していく上で困難な状況である。

\* 年齢は調査時点

表2 転入してきた母親が感じた不安・困難

転入してきた母親が感じた不安・困難の語り	コード	カテゴリー
<ul style="list-style-type: none"> <li>三人目を妊娠していた時、引っ越しの片付けと新しい幼稚園に子どもがいて、環境が変化してすごいイライラしてしまっただけで大変でした</li> <li>やっぱり生活、幼稚園でどんな感じかな、お友達とうまくやっているのかなという心配があります</li> <li>引っ越してきて三人で主人と私と一番上の子と暮らしていた時は、やっぱり夜は寝ないし初めての育児だったので家事も、おむつ替えて、風呂入れたりしていたら洗濯できなかったりして</li> </ul>	<p>環境の変化へのストレスに対処することの困難</p> <p>環境の変化への子どもの適応に対する不安</p> <p>環境の変化の中で初めての育児と家事を両立することの困難</p>	環境の変化に適応することの困難
<ul style="list-style-type: none"> <li>育児の中で、漠然とした不安がありますよね、こんな感じでいいのかなとか、そういうのがね</li> <li>小学生になる一番上の子が、字をしっかりと書けるように教えた方がいいのかな、挨拶きちんとできてほしいなとか思います</li> <li>上の子の爪をかむ癖とか真ん中の子が足が痛いとどこかか痛いとというのは、二人とも早くに下ができたので、甘える期間が短かったからなのかな</li> </ul>	<p>自分の育児に自信が持てない不安</p> <p>理想の育児と現実とのギャップ</p> <p>愛情の欲求が満たせていないことへの不安</p>	理想とする母親役割を果たすことの困難
<ul style="list-style-type: none"> <li>外に出たいなっていう気持ちと、出たらどっつと疲れちゃうっていう気持ち</li> <li>一日一回も外に出なかったっていうときは、この子もストレスたまるだろうなって思ってしまって悩んでしまいます</li> <li>丸一日私が大人と会話しないということがあって、それが思っていたより大変だった</li> <li>ずっと24時間お母さんでいるところが大変だった</li> </ul>	<p>子どもを外へ連れだせないことへの葛藤</p> <p>子どもが感じるストレスに対する不安</p> <p>大人と会話ができないつらさ</p> <p>母親であり続けることの困難</p>	母子だけの関係から社会生活を広げていくことの困難
<ul style="list-style-type: none"> <li>一年くらい前から、違うかなって、下と比べても違うなっていうのがあったんで、何回か幼稚園の先生に相談していました</li> <li>今、○幼稚園に入れていて、物事の始まりと終わりがわからないと、混乱してしまったり不安が強くなっていうのもあって、対応に限界があって</li> <li>自分の思いがうまく処理できないと、パニックになってものごく泣くんですが、周囲からどう思われるんだろうって精神的にストレスになることもある</li> </ul>	<p>子どもの発達状況への解消できない違和感</p> <p>子どもの障害に対応できない環境への不安</p> <p>障害に起因する子どもの行動が周囲から理解されないことへの不安</p>	発達障害をもつ子どもを地域で育てていく上での困難
<ul style="list-style-type: none"> <li>主人に相談しても「お前が不器用だからいけなだよ」とか言われて</li> <li>実家の母に相談していると「なんでそんな大変に思ってるの？子育てなんて楽しいじゃない。」なんて言われちゃったりするんですけど。その言葉に逆に落ち込んだり</li> <li>夫は自分の時間は邪魔されたくないの、「子どもがヤダヤダパパと遊びたい」ってぐずりだすと、夫が怒りだす前に「パパテレビ見てなって」言っただけで子どもが先にお風呂に入る。ずっと一緒にいて、夫は譲れない人とわかってるので、イライラされるんだったら、どうにか流した方が平和にいくかな</li> <li>ほんとに地元に残っている友達うらやましいなって思いましたね。「ちょっとお母さん来て」って言うとなられるからいいね</li> </ul>	<p>夫から育児方法を批判されることへの不満</p> <p>実母との育児観の相違に対する失望</p> <p>夫へ育児の協力を求めることへの気兼ね</p> <p>すぐに実母の支援が得られない新しい環境への不満</p>	家族からの支援を得にくい中で育児をする困難

困惑しながら取り組むという「環境の変化の中で初めての育児と家事を両立することの困難」があった。また、“幼稚園でどんな感じかな、お友達とうまくやっているのかなと言う心配があります”というように「環境の変化への子どもの適応に対する不安」もあった。

## 2) 理想とする母親役割を果たすことの困難

〈理想とする母親役割を果たすことの困難〉は、「自分の育児に自信が持てない不安」「理想の育児と現実とのギャップ」「愛情の欲求が満たせていないことへの不安」の3つのコードから形成された。

“育児の中で漠然とした不安がありますよね。こんな感じでいいのかなとか、そういうのがね”と語っているように、「自分の育児に自信が持てない不安」の表れがあった。また、“小学生になる子が、字をしっかりと書けるように教えた方がいいのかな、挨拶がきちんとできてほしいなとか思います”という語りから、小学生になる子は字が書けることや挨拶がきちんとできることという理想をもっているが、現実には実現していない「理想の育児と現実とのギャップ」があり、理想の育児のために母親として適切にふるまいたいという思いを持っていた。更に、兄弟との関係においては、“二人とも早くに下（の子）ができたので甘える期間が短かったのかな”と語っているように、上の子には愛情の欲求を十分に満たすことができなかつたのではないかという不安を持っていた。

## 3) 母子だけの関係から社会生活を広げていくことの困難

〈母子だけの関係から社会生活を広げていくことの困難〉は、「子どもを外へ連れ出せないことへの葛藤」「子どもが感じるストレスに対する不安」「大人と会話ができないつらさ」「母親であり続けることの困難」の4つのコードから形成された。

子どもを連れて母親が“外に出たいという気持ちと、出たらどっと疲れちゃうという気持ち”の中で、「子どもを外へ連れだせないことへの葛藤」を感じていた。また、“1日1回も外に出なかつたっていう時は、この子もストレスがたまるだろうなって思って悩んでしまいます”と外出ができないことで「子どもが感じるストレスに対する不安」があると同時に、母親自身も“丸一日私が大人と会話しないうことがあって、それが思っていたより大変だった”というように「大人と会話ができないつらさ」があった。しかも子どもと離れることができず“ずっと24時間お母さんでいるところが大変だった”というように「母親であり

続けることの困難」があった。

## 4) 発達障害をもつ子どもを地域で育てていく上での困難

〈発達障害をもつ子どもを地域で育てていく上での困難〉は、「子どもの発達状況への解消できない違和感」「子どもの障害に対応できない環境への不安」「障害に起因する子どもの行動が周囲から理解されないことへの不安」の3つのコードから形成された。

発達障害の子どもをもつ母親は、“下（の子）と比べても違くなっていうのがあったんで、何回か幼稚園の先生に相談をしていました”というように「子どもの発達状況への解消できない違和感」を感じていた。また、“今、〇幼稚園に入れていて、物事の始まりと終わりがわからないと、混乱してしまったり不安が強いついていうのもあって、対応に限界があって”というように幼稚園の対応に限界を感じて「子どもの障害に対応できない環境への不安」があった。“パニックになって泣くんですが、周囲からどう思われるんだろうって精神的にストレスになることもある”と子どもの状態が周囲に及ぼす影響を心配して「障害に起因する子どもの行動が周囲から理解されないことへの不安」をもっていた。

## 5) 家族からの支援を得にくい中で育児をする困難

〈家族からの支援を得にくい中で育児をする困難〉は、「夫から育児方法を批判されることへの不満」「実母との育児観の相違に対する失望」「夫へ育児の協力を求めることへの気兼ね」「すぐに実母の支援が得られない新しい環境への不満」の4つのコードから形成された。

母親は“主人に相談しても、お前が不器用だからいけないんだよ、と言われて”と「夫からの育児方法を批判されることへの不満」があった。また、実家の母に相談しても“なんでそんな大変に思っているの？子育てなんて楽しいじゃない、なんて言われちゃったりするんですけど、その言葉に逆に落ち込んじゃう”と「実母との育児観の相違に対する失望」を感じていた。更に、夫に“ずっと一緒にいて、夫は譲れない人とわかっているんで、イライラされるんだったら、どうにか流した方が平和にいくかな”と「夫へ育児の協力を求めることへの気兼ね」をして家族への育児の協力が得にくい状況での困難を感じていた。また、転入してきたことにより“ほんとに地元に残っている友達うらやましいなって思いましたね、ちょっとお母さん来てって言うのと来られるからいいね”と「すぐに実母の

支援が得られない新しい環境への不満」があった。

#### IV. 考 察

転入した母親が感じた不安・困難から、保健師に必要とされる支援の在り方について考察する。

##### 1. 新しい環境の中で育児上の課題を乗り越えていくための支援

転入してきた母親にとって、住居の整備や生活圏の把握が十分ではない新しい環境の中で、育児や家事をすることは心身の大きなストレスであり困難な状況が明らかになった。また、母親自身だけではなく、子どもの環境の適応に対する困難が生じていることも示された。

諏澤<sup>6)</sup>の報告によれば、居住年数が浅いほど、インターネットを通じた情報源による傾向があり、環境から孤立している状態にある人が多い。保健師は、転入者の話を丁寧に聞き取り、子どもの成長発達や周囲の身体的・精神的支援の状況を把握すること、予防接種や健康診断など公的な支援サービスと共に、身体的支援としての保育サービスや仲間作りを目的とした育児グループ活動・子育て教室など、個別性に応じ、適切な支援サービスの情報提供を行うことが重要である。そのため、転入して比較的早い時期に、転入手続き等の機会を活用し、家族と接点をもつことができるよう、担当する関係窓口との連携を緊密に行うことが必要であると考える。

##### 2. 自分らしい母親役割を獲得していくための支援

育児をする上で、子どもの心身の健康や発達状態に伴う様々な出来事に遭遇し、不安に感じ、その対応に戸惑い混乱する状況は、母親が一様に経験することである。その過程を経て、母親自身も子どもと共に人間的な成長を続けていくことができる<sup>7)</sup>。転入した母親は育児上の困難な課題を、新しい環境というストレスの高い状況の下で乗り越えていかななくてはならない。本研究においては、理想の育児に対するイメージに対して、自分たちがその役割を果たすことができないという困難をもっていることが明らかになった。小坂の報告によると、幼児を持つ母親は、自分が理想とする親役割に対して満足感が低い傾向がある<sup>8)</sup>。幼児期は、子どもの成長発達上の問題が身体面から行動や性格、対人関係などの精神面に移って複雑になる<sup>9)</sup>ことも加

わり、「理想の育児と現実とのギャップ」がますます大きくなり「自分の育児に自信が持てない不安」が増すのではないかと考えられる。転入してきた母親は周囲に知り合いもいない状況で、「理想の育児と現実のギャップ」を埋めるための子育てに対する考えや方法を共有したり、育児のモデルとなるような先輩の母親と接点をもったりすることは難しい。

保健師は、母親の不安困難な内容を明確にし、現在の育児に対する承認と共に予測される問題を見据えた適切な助言や子育て支援に関する情報提供、思いを共有できる仲間づくりとなる育児グループ組織化の支援により、母親が困難を乗り越え、自分らしい満足した育児をすることに寄与できるのではないかと考えられる。

##### 3. 社会との関係を結びにくい母子が、地域社会に溶け込んでいくための支援

本研究において、転入したため情報が少なく、幼い子どもを抱えて外出する力がない母親にとって、「子どもが感じるストレスに対する不安」や「子どもを外へ連れ出せないことへの葛藤」のように、子どもの困難を母親が自分自身の問題として受けとめていると同時に、母親自身も母子だけの関係性へのつらさがあり、ストレスの高いことが明らかになった。

阿部<sup>9)</sup>によれば、趣味に時間を割いている母親や地域活動や自分の学習活動のために外出する母親は育児不安が弱い傾向が認められている。保健師は、ファミリーサポートセンターなどの一時預かりや外出を支援する人的な保育サービスの情報と共に、母親が自分自身のために出かけ、大人だけで集うことのできる趣味や社会活動の場に関する情報提供も必要であると考えられる。そのため市町村の担当部署内にとどまらず、子育て支援センターといった子育て支援全般にわたる各種関係機関との連携を緊密に行い、母親が外出できる機会や手段が整っている最も有効な支援サービスを判断し、適切な支援を提供できるようにすることが重要である。

##### 4. 困難な課題を抱え専門的な支援ニーズが高い母子への支援

子どもの抱える成長発達上の問題やそれに対応する環境に大きな不安をもっている家族においては、専門家による支援ニーズの必要性が明らかになった。障害をもつ子どもの家族は、地域で生活すること自体が困

難な状況であり、特に障害児の母親にとって早期治療と訓練の早期開始が養育負担感の軽減に有効であるといわれている<sup>12)</sup>。しかし、現実には障害の疑いの時期と病院受診の時期に開きがあることも指摘されており<sup>13)</sup>、本研究においても同様の結果であった。

専門家の支援による正確な情報提供と迅速な治療開始のために、保健師は転入直後から速やかにハイリスクの家族を把握し、専門家の支援につなげることが極めて重要になる。直接、家族と接することができる機会を的確にとらえ、十分に訴えや話を聴きとった上で専門機関へつなげていくことが必要である。また、保育園や幼稚園など関係機関との緊密な連携を図り、疑わしい場合は速やかに対応できるようにすることが重要である。更に、転入前の住所地の保健師等との情報共有を行い、迅速かつ的確な継続支援ができるようにすることも有効であると考えられる。

#### 5. ニーズに応じた育児サービスを適切に受けられるようにするための支援

本研究で、転入してきた母親が夫や実母といった身近な家族から、物理的また精神的にも支援を得にくい環境で育児をしていく困難が明らかになった。母親の不安やストレスの軽減には物理的な支援だけではなく、精神的な支援の重要性が示唆されている<sup>1-3)</sup>ことから推測すれば、本研究の母親が新しい環境の中で育児に対する困難が非常に強かったことが考えられる。

保健師は、母親に必要な情報提供をすると共に、母親をねぎらい、育児に対する困難を受けとめ支える情緒的なサポートが常に必要である。また、母親の最も身近な支援者としての父親への教育も重要である。両親学級のような機会をとらえ、父親が妊娠期から育児に関する知識と協力体制の必要性を理解し、具体的な援助技術を習得すること、また、母親の思いや困難な状況を理解するために、母親の話を聴いたりねぎらいの言葉かけをしたりする心理的なサポートの重要性を教育することが必要である。特に、父親が育児や家事といった具体的な援助が難しい状況であっても、時間や場所を問わずにできる心理的サポートを積極的に行うことを父親が認識し、実現できるような家族関係への働きかけが有効であると考えられる。

### V. おわりに

転入した母親の育児に対する不安や困難な内容を明

らかにすることを目的に、乳幼児をもつ母親3名の語りを質的帰納的に分析した結果、〈環境の変化に適応することの困難〉〈理想とする母親役割を果たすことの困難〉〈母子だけの関係から社会生活を広げていくことの困難〉〈発達障害をもつ子どもを地域で育てていく上での困難〉〈家族からの支援を得にくい中で育児をする困難〉の5のカテゴリーが抽出された。母親が新しい環境の中で育児上の課題を乗り越え、個別の困難な状況に応じた育児ができるようにしていくために、保健師は迅速で適切な支援サービスの情報提供が必要であり、更に母親を精神的に支援する重要性が示唆され、育児グループ活動といった仲間と困難を共有できる場の提供や身近な支援者としての父親の教育が必要であることが考えられた。

### VI. 本研究の限界

本研究は対象とした母親が3名と少なく、理論的飽和には達していないため、一般化するには至っていない。今後は、対象数を増やし継続して調査することで、更に転入者の育児上の不安や困難と支援の内容を明らかにしていくことが必要である。

### 文 献

- 1) 上野恵子・穴田和子ら：文献の動向から見た育児不安の時代的変遷。西南女学院大学紀要 14：2010：185-195。
- 2) 唐田順子：乳幼児を持つ母親のサポート状況と育児不安との関連—病産院サポートを含めた分析—。母性衛生 48(4)：2008：479-488。
- 3) 阿部範子：母親のライフスタイルおよび充実感と、育児不安の関係。日本赤十字秋田短期大学紀要 12：2007：1-6。
- 4) 阿部範子：母親の育児不安と育児支援ネットワークとの関係。母性看護 37：2006：140-142。
- 5) 総務省：平成12年男女別・年齢別人口移動：<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2000/idoul/00/01.htm>
- 6) 諏澤宏恵：乳幼児をもつ母親の新環境への適応プロセス—有機体システム論からみた移行モデルの概念化—。小児保健研究 68：2009：623-631。
- 7) 柏木恵子・若松素子：「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み。発

- 達心理学研究 5 : 1994 : 72-83.
- 8) 小坂千秋：乳児を持つ母親の親役割満足感を規定する要因。発達研究 18 : 2004 : 73-87.
- 9) 厚生労働省：平成15年版 厚生労働白書 : 2003 : 24.
- 10) 神谷哲司：育時期家族への移行にともなう夫婦の親役割観の変化についての個性記述的検討— 3 事例の縦断的量的データと回想的面接調査による質的データから—。地域学論集 2 (3) : 2006 : 367-388.
- 11) 藤井加那子・永井利三郎：育児期にある母親の育児満足感に影響する因子—子育て不安の認識の有無による違い—。小児保健研究 67 : 2008 : 10-17.
- 12) 相浦沙織・氏森英亜：発達障害児をもつ母親の心理的過程—障害の疑いの時期から診断名がつく時期までにおける10事例の検討—。目白大学心理学研究 3 : 2007 : 131-145.

